

# Contents

<b>1 基本定義</b>	<b>2</b>
1.1 Riemann 計量	2
1.1.1 定義と構造	2
1.1.2 Riemann 計量から誘導される距離	5
1.1.3 Riemann 計量がテンソル束上に与える内積構造	6

# 1 基本定義

## 1.1 Riemann 計量

### 1.1.1 定義と構造

#### Definition 1.1. Riemann 計量

多様体  $M$  上の Riemann 計量とは

1.  $\forall p \in M$ , 正定値対称二次形式  $g(p) : T_p M \times T_p M \rightarrow \mathbb{R}$  とする
2. この  $g(p)$  は滑らかである. 言い換えれば,  $\forall X, Y \in \Gamma(TM)$ , 関数

$$g(X, Y) : M \times \mathbb{R}, \quad p \mapsto g(p)(X_p, Y_p)$$

は  $C^\infty$  である

Riemann 計量  $g$  を持つ多様体  $M$  を Riemann 多様体と呼び,  $(M, g)$  で表す. 書く便利のため,  $g|_p$  または  $g_p$  で Riemann 計量  $g$  が点  $p$  に制限されたものを表す. また,  $X \in T_p M$  に対して,  $|X|_g$  または  $|X|$  で  $X$  が Riemann 計量  $g$  に関する長さ  $g_p(X, X)^{\frac{1}{2}}$  を表す

#### Definition 1.2. 局所座標

Riemann 計量  $g$  の局所座標というのは,  $M$  の任意の局所座標系  $(x^i)_{1 \leq i \leq n}$  に対して,  $\forall p \in U$ ,

接空間  $T_p U$  は  $\left\{ \partial_i = \frac{\partial}{\partial x^i} \right\}_{1 \leq i \leq n}$  からなるので,  $g_p$  は  $\{g(\partial_i, \partial_j)\}_{1 \leq i, j \leq n}$  で決める. このとき, Riemann 計量の定義より, これは  $U$  上の  $C^\infty$  関数族であり, 局所で  $g = g_{ij} dx^i dx^j$  で表す

具体的に書くと,  $g = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n g_{ij}(p) dx^i \otimes dx^j$  になる. 幾何の教科書では, よく Einstein の縮

約記法を使っている. 例えば,  $X^i \omega_i$  が表しているのは  $\sum_{i=1}^n X^i \omega_i$ . もう一つの例は,  $g_{ij} dx^i dx^j =$

$$\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n g_{ij} dx^i \otimes dx^j$$

**Remark 1.1.**  $\{\partial_i\}$  に対して, Gram-Schmidt の正規直交化すると, 局所で直交するベクトル場  $\{e_i\}_{1 \leq i \leq n}$  が存在し,  $g(e_i, e_j) = \delta_{ij}$  が成り立つ

**Remark 1.2.**  $g(\partial_i, \partial_j)$  は正確な記法ではないけど, 実際ここでは  $g_p \left( \left. \frac{\partial}{\partial x^i} \right|_p, \left. \frac{\partial}{\partial x^j} \right|_p \right)$  である

#### Theorem 1.1. Riemann 計量の存在性

任意の微分多様体  $M$  に対し, Riemann 計量  $g$  は常に存在する

Proof.  $M$  のある可算的な局所有限な局所座標系  $\{(U_\alpha, \phi_\alpha)\}_{\alpha \in \Gamma}$  を取る. ただし,  $\phi_\alpha : U_\alpha \rightarrow \mathbb{R}^n$  は局所座標を与える. 開被覆  $\{U_\alpha\}_{\alpha \in \Gamma}$  に対して, 単位分割を  $\{\chi_\alpha\}_{\alpha \in \Gamma}$  とする. 各  $U_\alpha$  上で,

$g_{\alpha, ij} = \delta_{ij}$  (単位行列) とすると,  $g = \sum_{\alpha \in \Gamma} \chi_\alpha g_\alpha$  は各  $U_\alpha$  の Riemann 計量である.  $\text{supp}(\chi_\alpha) \subset U_\alpha$

は成り立つので, 局所では有限である. よって,  $g$  は well-defined であり,  $C^\infty$  である.  $g_\alpha$  は正定値であり,  $\chi_\alpha \geq 0$  から,  $g$  は全ての点では有限個 (かつ少なくとも一つ) の正定値二次形式の線形結合であるので,  $g$  は全ての点では正定値である. これは Riemann 計量の存在性を示している  $\square$

以下は Riemann 計量の性質を考える

## 1. はめ込み

微分多様体  $M, N$  に対して,  $\dim M \leq \dim N$  とする.  $f: M \rightarrow N$  がはめ込みとすると,  $\forall p \in M, \exists U \subset M, \exists (x^i)_{1 \leq i \leq \dim M}, f(p) \in U, \exists V \subset N, \exists (y^j)_{1 \leq j \leq \dim N}, s.t.$  この二つの局所座標系で

$$f: (x^1, \dots, x^{\dim M}) \mapsto (x^1, \dots, x^{\dim M}, 0, \dots, 0) \quad (1)$$

陰関数定理より,  $f$  ははめ込み  $\iff \forall p \in M$ , 接写像  $f_*|_p: T_p M \rightarrow T_{f(p)} N$  は単射である.  $N$  上で Riemann 計量  $g$  が与えられたとき,  $f$  を用いて  $M$  上に Riemann 計量  $f^*g$  を次のように定義できる:  $\forall p \in M, X, Y \in T_p M$

$$(f^*g)(p)(X, Y) := g|_{f(p)}(f_*|_p(X), f_*|_p(Y)) \quad (2)$$

ここで  $f_*$  は単射であるので,  $f^*g$  は Riemann 計量である. また, 次のような例を考える

## (a) 等長同型

Riemann 多様体  $(M, g), (N, h)$  と微分同型  $f: M \rightarrow N$  に対して,  $f^*g = h$  なら, Riemann 多様体  $(M, g)$  と  $(N, h)$  は等長同型であるという. また,  $f^*g = h$  であるとは,  $\forall p \in M, X, Y \in T_p M, g_p(X, Y) = h|_{f(p)}(f_*|_p(X), f_*|_p(Y))$

## (b) 被覆写像

微分多様体  $M, N$  と  $C^\infty$  な被覆写像  $\pi: M \rightarrow N$  に対して, 定義より,  $\forall q \in N, q \in \exists V \subset N, \pi^{-1}(V) = \bigsqcup_{i \in I} U_i$ . ただし,  $\{U_i\}_{i \in I}$  は互いに交わらない開集合族であり,

$\forall i \in I$ , 制限写像  $\pi|_{U_i}: U_i \rightarrow V$  は微分同型である.  $N$  上で Riemann 計量  $h$  を仮定すると,  $\pi$  ははめ込みであるから,  $M$  上で Riemann 計量  $g = \pi^*h$  は定義でき, このとき,  $\pi: (M, g) \rightarrow (N, h)$  を Riemann 被覆写像という. Riemann 被覆写像は明らかに局所等長同型写像である

## (c) 部分多様体

$(M, g)$  を Riemann 多様体とし,  $\Sigma$  は  $M$  の部分多様体であるとする. このとき, 包含写像  $\iota: \Sigma \subset M$  は標準的な包含写像であり, はめ込みである. よって,  $\Sigma$  を  $g|_\Sigma = \iota^*g$  で Riemann 計量を入れることができる. この  $g|_\Sigma$  を  $g$  が  $\Sigma$  上に誘導する Riemann 計量といい,  $g|_\Sigma$  と書く. 定義より,  $\forall p \in \Sigma, X, Y \in T_p \Sigma \subset T_p M, g|_p(X, Y) = g_p(X, Y)$

**Remark 1.3.** 微分多様体の Whitney の埋め込み定理より, Riemann 多様体の Nash の埋め込み定理が導かれる: 任意のコンパクトな無辺 Riemann 多様体  $(M, g), \exists N > 0, f: M \rightarrow \mathbb{R}^N, s.t. f^*\delta_{ij} = g$

## 2. Riemann 計量の積

Riemann 多様体  $(M_1, g_1), (M_2, g_2)$  に対して, 積多様体  $M_1 \times M_2$  上で Riemann 計量  $g$  を次のように定義する:  $\forall (p_1, p_2) \in M_1 \times M_2, T_{(p_1, p_2)} M_1 \times M_2 \simeq T_{p_1} M_1 \times T_{p_2} M_2$  より,  $T_{(p_1, p_2)} M_1 \times M_2$  の接ベクトルは  $(X_1, X_2)$  の形に書け,  $X_i \in T_{p_i} M_i$  ので

$$g_1 \times g_2|_{(p_1, p_2)}((X_1, X_2), (Y_1, Y_2)) = g_1|_{p_1}(X_1, Y_1) + g_2|_{p_2}(X_2, Y_2) \quad (3)$$

と定義する. これにより, この Riemann 多様体を  $(M_1 \times M_2, g_1 \times g_2)$  と書く

**Example 1.1.**  $\mathbb{R}^n$  上で Euclid 計量  $\delta = (dx^1)^2 + \dots + (dx^n)^2$  を考えると,  $\forall m, n, (\mathbb{R}^n, \delta) \times (\mathbb{R}^m, \delta)$  と  $(\mathbb{R}^{m+n}, \delta)$  は等長同型である

## 3. 沈め込み

Riemann 多様体  $(M, g), (N, h)$  と微分多様体  $M$  の間の沈め込み  $f: M \rightarrow N$  に対し

て,  $\dim M \geq \dim N = k$ . 沈め込みの定義より,  $\forall p \in M, p \in \exists U \subset M$  と局所座標  $(x^i)_{1 \leq i \leq n}, \exists f(p) \in V \subset N$  と局所座標  $(y^j)_{1 \leq j \leq k}$  が存在し, この二つの局所座標系で

$$f : (x^1, \dots, x^k, x^{k+1}, \dots, x^n) \mapsto (x^1, \dots, x^k) \quad (4)$$

陰関数定理より,  $f$  は沈め込み  $\iff \forall p \in M$ , 接写像  $f_*|_p : T_p M \rightarrow T_{f(p)} N$  は全射である.  $p \in M$  に対し,  $V_p = \text{Ker}(f_*|_p) \subset T_p M$ ,  $(T_p M, g_p)$  は内積空間であるので

$$H_p := V_p^\perp = \{w \in T_p M | g_p(w, v) = 0, \forall v \in V_p\} \quad (5)$$

と定義できる. 沈め込みの定義より, 制限写像  $f_*|_p : H_p \rightarrow T_{f(p)} N$  は同型である. 各  $H_p$  上で  $g_p|_{H_p}$  があるから, 内積空間の間での線形同型がある:

$$f_*|_p : (H_p, g_p|_{H_p}) \rightarrow (T_{f(p)} N, h|_{f(p)}) \quad (6)$$

もし  $\forall p \in M$ , この同型は内積空間の間での同型であるなら,  $f : (M, g) \rightarrow (N, h)$  は Riemann 沈め込みである

#### 4. 共形写像

Riemann 多様体  $(M, g), (N, h)$  と微分同型  $f : M \rightarrow N$  に対して,  $\exists \lambda \in C^\infty(M)$  が存在し,  $\lambda > 0$  かつ  $f^*h = \lambda g$  が成り立つとき,  $f$  を共形写像という.  $\forall X, Y \in T_p M$ , 内積  $g_p$  を用いてそれらのなす角  $\theta$  を定義できる:

$$\cos(\angle_g(X, Y)) = \frac{g_p(X, Y)}{\sqrt{g_p(X, X)}\sqrt{g_p(Y, Y)}} \quad (7)$$

で, 定義より,  $\cos(\angle_h(f_*|_p(X), f_*|_p(Y))) = \cos(\angle_g(X, Y))$

### 1.1.2 Riemann 計量から誘導される距離

$[a, b] \subset \mathbb{R}$  に対し,  $(M, g)$  上の分割  $C^\infty$  曲線は  $a = c_0 < c_1 < \cdots < c_m = b$  と連続写像  $\gamma: [a, b] \rightarrow M$  が存在し,  $\forall k \in \{1, 2, \dots, m\}$ , 写像  $\gamma|_{[c_{k-1}, c_k]}$  は  $C^\infty$  である. 定義より,  $t \neq c_k$  のとき,  $\gamma'(t) \in T_{\gamma(t)}M$  は曲線  $\gamma(t)$  での接ベクトルである.  $|\gamma'(t)| = \sqrt{g_{\gamma(t)}(\gamma'(t), \gamma'(t))}$  とおくと, これは接ベクトルの長さであり, 曲線  $\gamma$  の長さは次のように定義される:

$$L(\gamma) = \int_a^b |\gamma'(t)| dt \quad (8)$$

**Theorem 1.2.**  $(M, d)$  は距離空間で, 距離  $d$  で導かれた位相と  $M$  が微分多様体として持つ位相は一致する

Proof. □

### 1.1.3 Riemann 計量がテンソル束上に与える内積構造

$M$  上が Riemann 計量  $g$  を持つとき、以下のように自然な同型が存在する：

$$\flat : TM \rightarrow T^*M, \quad X \mapsto g(X, \cdot) \quad (9)$$

言い換えれば、 $\forall M$  の接ベクトル場  $X, \flat(X) = X^\flat$  と定義する。ただし、 $\forall Y \in \Gamma(M, TM), X^\flat(Y) = g(X, Y)$ 。ここで  $\flat$  を使う理由は、ベクトル場  $X$  と 1-形式  $\omega$  に対し、ある特定な座標系  $(x^i)$  では  $X$  と  $\omega$  はそれぞれ  $X^i \frac{\partial}{\partial x^i}$  と  $\omega_i dx^i$  と表されるので、習慣的に  $X^i, \omega_i$  と書くから、 $X \rightarrow \omega$  は指標を下げる操作である。逆に、 $\flat$  の逆  $\sharp$  も次のように定義できる：

$$\sharp : T^*M \rightarrow TM, \quad \omega \mapsto \omega^\sharp \quad (10)$$

局所座標系を与えて、 $g$  を行列の形式  $(g_{ij})$  と表す、便利のため  $g_{ij}$  と書き、行列  $(g_{ij})$  の逆行列の  $(i, j)$  成分を  $g^{ij}$  と表す。この記号を使うと、以下のような結論が得られる

**Proposition 1.1.** ベクトル場  $X^i$  と 1-形式  $\omega_i$  に対して、 $X_i$  と  $\omega^i$  をそれぞれ  $X_i^\flat, \omega^{\sharp i}$  で表すと、 $X_i = g_{ij} X^j, \omega^i = g^{ij} \omega_j$  が成り立つ

Proof. □

**Proposition 1.2.**  $(M, g)$  の  $C^\infty$  関数  $f$  に対し、 $\nabla f$  は  $\nabla f = \sharp(df)$  と定義されていて、局所座標系では、 $\nabla f = \nabla^i f \partial_i$ 。ただし、 $\nabla^i f = g^{ij} \partial_j f$

Proof. □

これらの構造を用いて、テンソル束上に内積を定義できる。任意の 1-形式  $\omega, \omega'$  に対し、 $g(\omega, \omega') := g(\omega^\sharp, \omega'^\sharp)$  と定義する。この定義は局所座標系の選択によらないから、局所座標系では次のように計算できる

$$g(\omega_i, \omega'_i) = g\left(g^{ik} \omega_k \partial_i, g^{jl} \omega'_l \partial_j\right) = g^{ik} g^{jl} g_{ij} \omega_k \omega'_l = g^{ik} \delta_i^j \omega_k \omega'_l = g^{kl} \omega_k \omega'_l \quad (11)$$

この記号より、 $g^{kl} \omega_k = \omega^l$  が成り立つから、指標を変換することで、 $g(\omega_i, \omega'_i) = \omega^i \omega'_i$